

## 争わない優しさ

【聖書】創世記26章15～25節

ペリシテ人は、昔、イサクの父アブラハムが僕たちに掘らせた井戸をことごとくふさぎ、土で埋めた。アビメレクはイサクに言った。「あなたは我々と比べてあまりに強くなった。どうか、ここから出て行っていただきたい。」イサクはそこを去って、ゲラルの谷に天幕を張って住んだ。そこにも、父アブラハムの時代に掘った井戸が幾つかあったが、アブラハムの死後ペリシテ人がそれらをふさいでしまっていた。イサクはそれらの井戸を掘り直し、父が付けたとおりの名前を付けた。イサクの僕たちが谷で井戸を掘り、水が豊かに湧き出る井戸を見つけると、ゲラルの羊飼いは、「この水は我々のものだ」とイサクの羊飼いと争った。そこで、イサクはその井戸をエセク（争い）と名付けた。彼らがイサクと争ったからである。イサクの僕たちがもう一つの井戸を掘り当てると、それについても争いが生じた。そこで、イサクはその井戸をシトナ（敵意）と名付けた。イサクはそこから移って、更にもう一つの井戸を掘り当てた。それについては、もはや争いは起こらなかった。イサクは、その井戸をシホボト（広い場所）と名付け、「今や、主は我々の繁栄のために広い場所をお与えになった」と言った。イサクは更に、そこからベエル・シェバに上った。その夜、主が現れて言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神である。恐れてはならない。わたしはあなたと共にいる。わたしはあなたを祝福し、子孫を増やす／わが僕アブラハムのゆえに。」イサクは、そこに祭壇を築き、主の御名を呼んで礼拝した。彼はそこに天幕を張り、イサクの僕たちは井戸を掘った。

### 【序】 第二代族長イサク

旧約聖書の最初の文書創世記は 50 章から成っています。1～11 章は世界の歴史の始まり、始源史と言われて居り、人間の本性が描かれています。続く 12～50 章は族長史で、アブラハム、イサク、ヤコブという初期三代の族長の生涯を通して、信仰者の在り方が示されています。

今回私たちは、アブラハムの生涯について6回の日曜をかけて学びました。今日は二代目イサクについてです。イサクはアブラハムが 100 才、サラが 90 才の時にやっと与えられた秘蔵息子です。二人は神さまから誕生の予告を聞いた時に、「こんなに年をとっているのに」と思わず笑っています。そこで本当に誕生した時に、我が子を「イサク(笑い)」と名付けたのでした。

イサクはアブラハムとヤコブの間に挟まれて地味な存在で、聖書教育のカリキュラムではイサク本人については、今日一回しか学びません。しかし私は、神さまが男と女をお造りになって、共に生きていくようにと祝福された結婚について、私たちの人間の現実はどうだったのかを、イサクとリベカ夫婦を取り上げて6月 15 日に学びました。ですから川越教会としてはイサクについての第二回目の学びとなります。

### 【1】 イサクの素晴らしさ

イサクは父アブラハムに従って、カナンの地をさすらいながら、羊や山羊、牛等を養い育てるいわゆ

る羊飼いの生涯を送りました。自分の土地を所有し、家を建てて住み着く定住者ではなく、牧草や水を求めてあちこちをさまよい、天幕生活を続ける寄留者でした。寄留者は定住者から見ればよそ者です。その地の支配者に対しては最も弱い立場にあります。妻が美しいと、夫は殺されて妻を取り上げられてしまうこともあり得るのです。

アブラハムも、カナンの地に移住して直ぐに、飢饉に遭ってエジプトに避難した時と、100 才でイサクを与えられる少し前、ペリシテに寄留した時にも、サラ を妹だと言ってわが身を守っています。イサクも飢饉に遭った時、神さまからエジプトには行かず、ペリシテに留まるようにと命じられて、リベカを妹だと言ってわが身を守ろうとしていました。寄留の民は、妻を妻だと言えないほどに弱い立場だったのです。

しかし神さまはアブラハムに繰り返し約束されました。「これらの地をすべて あなたの子孫に与える、あなたの子孫を天の星のように増やし、地上の諸国民は すべて、あなたの子孫によって祝福を得る」。そして神さまはイサクにも同じ約束をお与えになったのです。アブラハムもイサクも弱い立場の寄留者だからこそ、神さまはすべての民の祝福の源としてお選びになったのです。このことを 私たちはまず、心に留めておかなければなりません。

イサクはペリシテのゲラル地方で飢饉の期間中を過ごしましたが、牧草の不足を補うために、土地に穀物の種をまいて農作もしてみました。すると 100 倍の収穫という神の祝福に与かりました。その結果飢饉の最中でも、羊も牛も 数を増し、イサクは豊かになっていきました。そして人々に妬まれるようになり、支配者アビメレクから「出て行っていただきたい」と言われてしまいました。

イサクは東に移動し、ゲラルの谷に天幕を張りました。そこはかつてアブラハムが寄留していた地で、アブラハムが掘った井戸が幾つもありました。しかしアブラハムが死ぬと、ペリシテ人が全部埋めてしまっていました。そこでイサクはそれらの井戸を掘り直しました。ところが水が豊かに湧き出ると、ゲラルの羊飼いたちが、「水は我々のものだ」と言いがかりをつけました。そこでイサクはその井戸を彼らに譲り、ほかの地に移動して井戸を掘りました。また掘り当てると、再びゲラルの羊飼いが取り上げようとしてきました。イサクは彼等にまた譲りました。イサクはさらに遠く東に向かい、もう一つ井戸を掘り当てました。

地中深く井戸を掘るには根気がいります。イサクはねばり強い人だったのでしょう。しかも折角掘り当てた貴重な井戸を次々と譲りました。争いを好まない温和な人柄でもあったのです。そして何よりも彼は、荒れ野で貴重な井戸を掘り当てる特別な才能に、恵まれていたようです。ゲラルの羊飼いたちは、そのように次々と井戸を掘り当てるイサクに、恐れを覚えたのではないのでしょうか。彼らは横取りすることを取り止め、争いは終わりました。

イサクはその井戸をレホボト(広い場所)と名付けました。「今や主は我々の繁栄 のために、広い場所をお与えになった」と言いました。その夜、主が現れて言われました。「わたしは、あなたの父アブ

ラハムの神である。恐れてはならない。わたしはあなたと共にいる。わたしはあなたを祝福し、子孫を増やす。わが 僕アブラハムのゆえに」。イサクはそこに祭壇を築き、主の御名を呼んで礼拝したのでした。

するとそこへ、ペリシテの王アビメレクがやってきて、友好協定を結ぼうと申し入れました。「以前、我々はあなたに何ら危害を加えず、むしろあなた方のためになるように計り、あなたを無事に送り出しました。そのようにあなたがたも、我々にいかなる害も与えないでください。あなたは確かに主に祝福された方です」(26:29)。

出て行けと言われた時は、果たしてアビメレクが言うような状況だったのでしょうか。依然として権力者の優位に立った凶々しい言い方です。でもイサクに対して秘かに恐れを感じてきている言い方です。嫌がらせや圧迫に抵抗せず一族の命を左右する貴重な井戸を、次々と掘り当てて生き抜いて行くイサクに、神が共に居られることを、アビメレクは認めざるをえなくなったのです。この人は神に守られ、神に祝福されている人だと恐れを覚えたのです。

イサクはアビメレクの申し出を穏やかに受けとり、祝宴を催して彼らをもてなしました。そして翌朝、彼らを安らかに送り出しました。ここにイサクの穏やかな人柄の良さが十分に現れています。彼は寄留者としての自分の立場の弱さを卑下していません。また父アブラハムのように生き抜いていく強さを持ち合わせていない自分に、少しも卑屈になっていません。自分は自分らしく生きていこうとしています。何故ならば、神さまはこのような自分を二代目としてお選びになり、父と同じ様にお導き下さっているという信仰に、しっかりと立っているからでしょう。ここにイサクの素晴らしさがあります。

## [2] モリヤの山上の体験

私たちは去る6日に広島、9日に長崎の原爆記念日を迎えました。そして一発で広島市を壊滅させた破壊力、さらに長い年月にわたる放射能障害で被爆者を苦しめる非人道的兵器を、世界のどこでも二度と使用させない決意を新たにしました。一昨日の15日には敗戦記念日を迎えました。近隣諸国を侵略し2000万人を超える人々の命を奪った戦争を決して繰り返してはなりません。もう絶対に戦争をしない国になるとの決意を新たにしなければなりません。

しかし世界各地で毎日銃が火を噴き、爆弾が破裂して、人々が殺されています。どうしたら戦争を止めさせることが出来るのでしょうか。神さまは丁度今日の聖書でイサクの生き方をお示しになりました。ここに一つの回答が示されています。それは生きていく上でどんなに必要な物でも、求められれば与えて争わない生き方です。イサクは井戸を一度二度と相手に奪われても与え続けて、遂に相手に奪うことを止めさせ、平和を得ました。私たちも、神さまが必ず平和をもたらして下さると確信して、与え続けて、神の業を待つ信仰に立つことです。

イサクは何時、何処でこのような信仰を身に着けたのでしょうか。先週の聖書教育は、25章の「アブラハムの死と埋葬」でした。二人の息子イシュマエルとイサクと一緒に父を丁重に葬りました。

二人は強烈なライバルです。反目する敵でした。アブラハムの妻サラは、自分が 75 才になっても跡継ぎを生むことが出来なかったので、自分の側女ハガルによってアブラハムの子を産ませ、跡継ぎとして育てました。それがイシュマエルです。

しかし 15 年後、90 才になったサラにイサクが与えられました。イサクが丈夫に育つ見通しが立つと、サラはイシュマエルとその母ハガルを砂漠に追放してしまいました。将来の相続争いを恐れたからです。非常に手前勝手な罪深い行為でした。イシュマエルはあらゆる人にこぶしを振りかざしてけんかする荒々しい気性の男です。当然サラとイサクに対して、激しい恨み・憎しみを抱いていたに違いありません。それがどうしてイサクと一緒に、サラの墓に父アブラハムを葬ることが出来たのでしょうか？

それはイサク可愛さの故にイシュマエルを追い出した後で、神さまがアブラハムにイサクをモリヤの山で燔祭にして献げよとお命じになり、アブラハムがそのご命令に従ってイサクを献げたからです。神さまはアブラハムの罪を厳しくお裁きになりました。そしてアブラハムはその裁きを素直に受けたのです。この有名な出来事は、当然イシュマエルの耳にも届いたことでしょう。そしてそれを知って、イシュマエルが心に抱いていた深い恨み・憎しみが溶けて、彼は癒されたのではないのでしょうか。

「主の山に備えあり」(創世記 22:14)と訳されている有名な言葉ですが、「備え」と訳されている原語は「見る、分かる、理解する」という語です。アブラハムはモリヤの山上で神さまの本当のお姿を見た、神さまがどのようなお方であるかを、あらためて良く分かったのです。燔祭は全き献身を現す信仰の行為です。神さまは、ご自身が先ずモリヤの山上にアブラハムとサラの罪を贖う燔祭の羊を備えた上で、アブラハムにイサクを献げよとお命じになったのでした。

その時から約 2000 年後、モリヤの山にはエルサレムの都が建てられていました。そのエルサレムの都のカルバリの丘で、神さまは、私たち全ての者の罪を贖い救うために、御独子イエスキリストを十字架に磔にされたのでした。使徒パウロはこのように語っています。「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために、死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」(ローマ5:8)。「わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず、死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものを、わたしたちに賜らないはずがありませんか」(ローマ8:32)。

神さまは、全ての者に祝福が及ぶようにと、4000 年も昔に先ずアブラハムを選んでお召しになりました。そして約束を必ず守る真実な全能の神であること、同時に、御子イエスキリストを十字架に磔にしてまでも私たちの罪を贖い、救おうとして下さる愛の神さまであることを、先ずモリヤの山上でお示しになったのです。そしてそのような神さまのお姿を見て、気性の荒々しいイシュマエルでもイサクと和解することが出来たのです。イサクもまだ少年だったとはいえ、父アブラハムと身をもって体験したモリヤの山上での真の神さまのお姿は、彼の生涯に決定的影響を与えずにはおかなかつ

たのです。

だからイサクは命の水でも人に与えることが出来たのです。ご自身の御子すらも与えて下さる愛の神さまを信じる事が出来たからです。必ず祝福を与えるとおっしゃった神さまの約束を信じる事が出来たからです。私たちもイサクの信仰に立てば、奪い合って争わず、譲り、与えて、平和を待つイサクになれるのではないのでしょうか。

### [結] イサクに続く信仰者

私たちは先週から「平和に関する信仰宣言」を2ページずつ交読しています。先週の第一戒で、「主に服従する私たちは、自分自身にとって最も大切なものさえも断念する」を読みました。イサクは最も大切な、命の水を与える井戸を断念し、相手に譲りました。

今日の第四戒で、「礼拝は主イエスへの服従行為であり、この世に対する断念である。私たちは礼拝を第一とする。主によって解放され、生かされた私たちは、もはや赦すこと、愛すること、分かち合うこと、生かすことしか許されてはいない。教会はただこれらのことをして、主に服従し、主の恵みを喜ぶ。」と読みました。

イサクは主なる神への服従から、井戸を分かち合うことしか許されていないと信じたのです。「第六戒 暴力のあるところに平和はない。主に従う教会は、敵を愛し、迫害する者のために祈る」。イサクは井戸を取り上げようとする者を愛し、祈りつつ与えて、自分は次の井戸掘りに取り組みました。

私たちも十字架に死んで下さったイエス・キリストを救い主と信じますから、イサクに続く信仰者になり、井戸を譲り与えて平和を造りだす道を歩みたいものです。聖霊の導きを祈り求めて、平和の証人になりたいものです。 完